

# 『錢形平次捕物控』

野村胡堂

こんじき おとめ  
金色の處女

—

「平次、折入つての頼みだ。引受けてくれるか」

「へエ——」

錢形の平次は、相手の眞意を測り兼ねて、そつと顔はなを上げました。二十四、五の苦にがみ走ぱしった好いい男おとこ、藍微塵あいみじんの狭せまい袷あわせが膝小僧そくを押し隠やぞうして、彌造やぞうに馴なれた手てをソッと前に揃そろえます。

「一つ間違あさくらえば、御奉行朝倉石見守まさ様さまは申すに及ゆばず、御老中方じろうじゅうがたに取はらつても腹はら切り道具ぐうだ。押お付けけがましいが平次、命いのちを投なげ出すつもりでやつて見てはくれまいか」

と言いうのは、南町奉行與力よりきの筆頭笛野新三郎ささのしんざぶろう、奉行朝倉石見守あさくらいわみのかみの智惠囊ちえぶくろと言いわれた程この人物ひとですが、不思議じんぴんに高貴こうきな人品骨柄こつがらです。

「頼むも頼まないも御座いません。先代から御恩につた旦那様の大事とあれば、平次の命なんざ物の数でも御座いません。どうぞ御遠慮なく仰しやつて下さいまし」

敷居の中へいざりに入る平次、それをぞし招くように

座布團を滑り落ちた新三郎は、

「上様には、又雜司ヶ谷の御鷹狩を仰せ出された」「エツ」

「薄々は存じて居ります」

それは平次も聽き知つて居りました。三代將軍家光公が、雜司ヶ谷鬼子母神のあたりで御鷹を放たれた時、何處からともなく飛んで來た一本の征矢が、危うく家光公の肩先をかすめ、三つ葉葵の定紋を打った陣笠の裏金に滑つて、眼前三歩のところに落ちたといふ話。

それツ——と立ちどりうに手配しましたが、曲者の  
てはい  
くせもの

行方は更にわかりません。  
ゆくえ

後で調べて見ると、鷹の羽を矧いた籠深の眞矢で、  
たか は のぶか ほんや  
しろみが やじり まつまえ  
白磨き一寸あまりの矢尻には、松前のアイヌが使うと  
いづつ『トリカブト』の毒が塗ってあつたといふことです。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雜司ヶ谷  
めしと  
おたかの おお いだ  
の御鷹野を仰せ出された。御老中は申すに及ばず、お  
側の衆からもいろいろ諫言を申上げたが、上様日頃の  
かんげん  
御氣性で、一旦仰せ出された上は金輪際變替は遊ば  
いだ  
されぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守様へ直々の  
あさくらいわみのかみ  
お頼みで、是が非でも御鷹野の當日までに、上様を  
とおや  
遠矢にかけた曲者を探し出せとのお言葉だ。何んとか  
よ  
良い工夫はあるまいか」

一代の才子笛野新三郎も、思案に餘つて岡つ引風情  
あま  
すが  
おか  
ぴきふぜい  
の平次に縋り付いたのです。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとに  
しています（一部加工しています）。

「青空文庫」 <http://www.aozora.gr.jp/>